

好き嫌いは別のことだが、グローバルには宿泊とカジノは相性が良い。年間9兆円産業のパチンコを脇目で見ながら、法で賭博禁止も妙な現象ではある。製紙会社の創業者一族の例に見るように、賭け事も間違えば身持ちを崩すことにはなるから、自律精神がなければ賭場に近寄るべきではないが、転ばぬ先の杖だけで、一切賭け事禁止もまた、大人の自律を妨げるものであろう。

皆保険の日本から見ると、米国の健康保険制度はいかにも時代錯誤に見えるけれども、Self-help is the best help の思想が徹底すると、皆保険の方が歪んで見えるものらしい。自由診療を旨とする医療の場合は、これまたグローバルにみると、リゾートクラブと相性が良い。同じところにたびたび訪れ、また、一か所に長期に滞在するリゾートライフは、健康増進や病気治癒にはプラスになる場合がある。日本にも極めて居心地の良い病院がいくつかあるが、何かの拍子に夜中にうめき声が聞こえれば、いくら居心地良くても病院には違いないということにはなる。リゾートの病院に検査入院しても、結果がシロであることを期待すればこそである。カジノしても医療にしても心身ともに健康であることが、リゾートライフを楽しむ基本であることは言うまでもない。

このところ躍進著しい大阪維新の会の幹事長の松井大阪府知事が、シンガポールのラッフルズ・メディカル・グループ (RMG) が運営するラッフルズ病院を視察したという (産経紙)。JR 大阪駅北側の梅北ヤードに進出計画があり、「特区で地方税ゼロに」というメリットを付して誘致をしている。医療は生命保険や医薬品開発、健康維持情報システム、健康食品の生産販売や病院給食の提供、公衆衛生などすそ野が広く、多くの事業分野が関連する。そして機械化には限度があり人手の活用は不可避ゆえに雇用吸収効果もある。ラッフルズ・メディカルとマリーナ・ベイサンズ、リゾート・ワールド・セントーサの組合せ視察は、なかなかの着眼である。海外のタイムシェア (バケーションオーナーシップ) というと、日本近郊ではハワイのヒルトン、マリオットやウィンダムが通り相場だが、シンガポールやマレーシアも昔から盛んである。タイ・アンダマン海のプーケットや、1983年のヌサドゥア・ビーチに端を発するバリ島という好立地もある。そして潜在顧客が新興国中国に増加しそのボリュームも拡大している。ひとくちに中国といってもかなりの地域差があり、先に進んでいった上海や蘇州・杭州・広州などでは顕在化している。つまりは、こうした南の島のビーチに余暇を過ごす人々が増えはじめている。こういう客を大阪にも呼ぼうというはいかにも維新の会らしい政策ではある。

リゾートの定石からいうと、四季の変化の明確な温帯より、気温の年較差の少ない (年間通して暖かい・暑い) 南の方が何かと都合が良い。そのハンデを大都会で埋めようとする。そこで医療やカジノが必要になるのであろうが、これはまさにデザインの問題である。

ただし、1990年バブルの日本のリゾート開発では、いささかひどいプランもあって、とても先進国の開発と言えた状態ではなかった。この点、南の地域や国のなかには、上手に処理したリゾートクラブが少なくないのである。松井氏がどう学ばれたか、興味津々である。

また、ハワイの著名タイムシェアの購入者の70%が日本人という話題もあり、日本のわがリゾートクラブの業界人も、松井氏以上に勉強しなければならない。いままさにグローバル市場の時期を迎えている。